



公益財団法人 ベネッセこども基金

アニュアルレポート

2024

おかげさまで
10周年を
迎えました



こどもたちが 自らの可能性を広げられる 社会をめざして



理事長ごあいさつ

ベネッセこども基金は、「こどもたちが自らの可能性を広げられる社会」の実現をめざし、2015年に公益財団法人化しました。以来、こどもを取り巻く環境の改善に取り組み続け、おかげさまで本年、10周年を迎えることができました。これまで温かく支えてくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

小児科医として医療・教育・研究の現場でこどもたちと長年向き合ってきた経験の中で、医学的な支援だけでは解決できない課題の多さを痛感し、こどもを身体・心理・社会の三側面 (biopsychosocial) でとらえ、支援する必要性を強く感じております。

こうした想いから、当基金では、こどもたち

が健やかに育ち、社会とつながりながら自分の可能性を広げられるよう、多様な分野の方々と協働して取り組んでいます。

これまで、助成事業では、経済的困難や病気を抱えるこどもたちへの学びの支援をはじめ、自治体と連携した多様性を尊重する教育の推進、子どもの権利について社会全体で考える場づくりなど、未来を見据えた取り組みを進めています。

こどもたちが安心して自分らしく生き、希望を持って未来を描ける社会をめざして、これからも皆様と共に歩みを進めてまいります。今後とも、変わらぬご支援とご指導を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

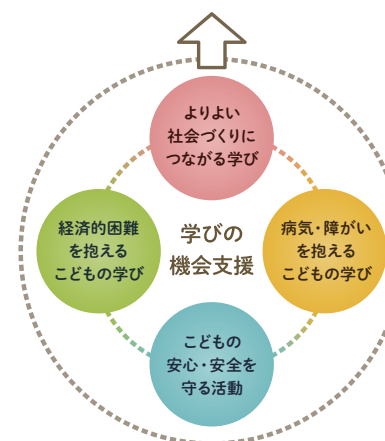


公益財団法人
ベネッセこども基金 理事長
五十嵐 隆

1978年東京大学医学部医学科卒業。同小児科、清瀬小児病院腎内科、Harvard大学Boston小児病院を経て、東京大学大学院教授。2012年より国立成育医療研究センター理事長。東京大学教育研究評議員、日本学術会議第二部会員、日本小児科学会会長、東京大学医師会会長を歴任。

健康とは「病気でない」ことではなく、身体・心理・社会的well-beingな状態であるにとらえ、成育基本法やこども家庭庁の設立に尽力。身体的well-beingは世界一でも、自殺率の高さなど心理的well-beingが国際的に低位と評されるわが国の医療・保健のあり方を見直し、学校健診の個別健診化など、こどもの心理・社会的well-beingの実現をめざして活動中。

こどもが自らの可能性を 広げられる社会



ごあいさつ 1

10周年特集

- ベネッセこども基金 10年間の歩み 3
- 特別インタビュー
「こども×学び」支援のこれまでとこれから 5
- こどもから見た
「学び」の力と「当事者の声」 7

2024年度事業報告

助成事業 9

——全国各地でこどもの学びを支援する非営利団体を支援

自主事業 15

——各領域の専門家・団体と学びの場を創出

決算報告 21

財団概要 22





支援の輪が広がった10年を振り返る

10-Year History

皆様と共に、こどもの学びを支援してきたこの10年。これからも活動を深めていきます。

vision

こどもたちが自らの可能性を広げられる社会をめざし、「こどもの学び」を支援します。

mission

制度から抜け落ちて支援が行き届かない領域を見極め、助成事業と自主事業の両面から社会課題解決に取り組みます。

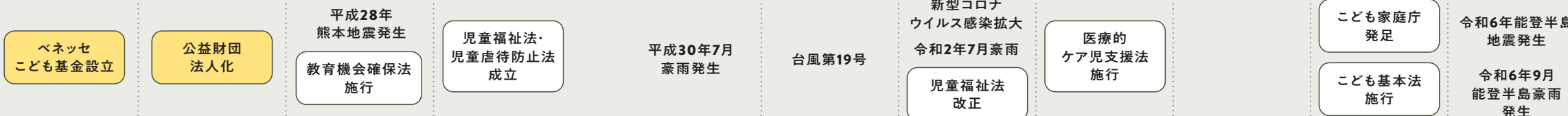


10周年特集

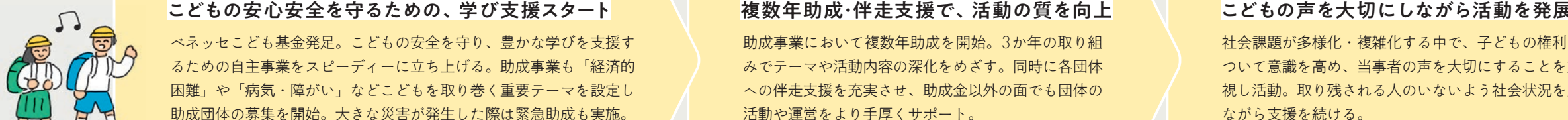
ベネッセこども基金10年間の歩み

2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020 2021 2022 2023 2024

世の中の動き



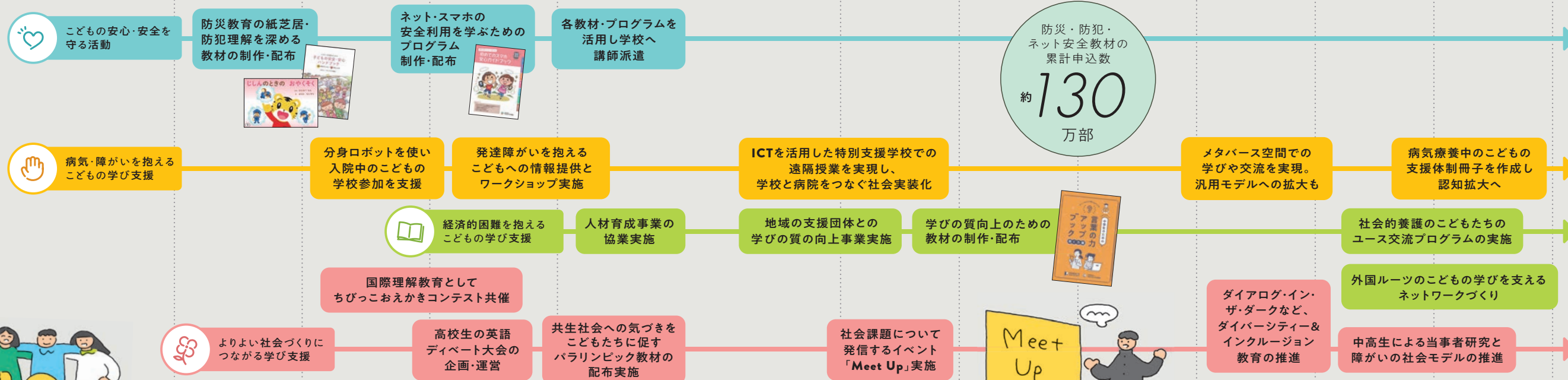
事業トピックス



助成事業



自主事業





「こども×学び」支援のこれまでとこれから

学びから生活・体験へ 広がり続けたこども支援

青木 ベネッセこども基金設立10周年の節目に、この10年のこども支援とこれからについてお話をうかがいます。まず、自主事業や助成事業で協業してくださった李さんにお聞きます。

李 「経済格差が教育格差となり貧困の連鎖を生む」ということが注目され、この10年で学習支援は大きく広がりました。厚労省や文科省の制度も進みましたが、貧困率が下がり切らない中で虐待や不登校、こどもの自殺は増え続けています。こどもを取り巻く環境は複雑で深刻です。こどもたちの家族の生活を支えることも必要だと痛感しています。

10年支援してきた子が20代になり、高校を出ても就職先が見つからない、就職できても離職してしまう、生活保護世帯ではアルバイトで学びが圧迫されるなどの現実を多数見てきました。学びの支援から出発した私たちも、「家庭丸ごと」の生活支援を包括的にやらざるを得ない状況です。

青木 包括的な支援には行政との連携も不可欠ですね。

李 我々の団体は自治体のデータベースで困難度に応じたリスクフラグを立て、抽出したこどもにアウトリーチする取り組みも進めています。つくば市では子ども政策アドバイザーとして、市長、教育長、福祉部長などと定期的に会議を持ち、縦割りの隙間をつなぐ役割を担うようになりました。

本来は、さらに生活保護、虐待相談、家計相談など複数の窓口がNPOなど民間の支援に接続され、ひとつの相談から多面的な支援を組み立てられるとよいのですが、そこはこれからの課題ですね。

青木 ベネッセこども基金理事の佐久間さんは、こどもの生活により近い現場もお持ちですね。

「学びも生活も
「家庭丸ごと」
支える包括支援



認定NPO法人Learning for All
代表理事
李 炯植
ベネッセこども基金と、
自主事業・助成事業で協業

すべてのこどもの
人権が守られる社会に



ベネッセこども基金理事
佐久間 貴子
株式会社ベネッセスタイルケア
取締役 常務執行役員
こども・子育て支援カンパニー
カンパニー長

佐久間 保育園や学童はこどもにとって毎日の生活の基盤です。私たちは、こどもにとって安心できる居場所であること、ここにいたいと思える空間や関係性づくりを大切にしています。こども家庭庁から発信されている『はじめての100か月の育ちビジョン』にもあるように、「安心と挑戦の循環」が日々の生活の中にあることが大切です。その環境があって初めて、こどもは学びや挑戦に向かうことができますと思います。安心できる居場所づくりはとても重要だと感じています。また最近では子どもの権利条約の4つの原則の一つ、「子どもの意見の尊重」の大切さについてよくスタッフと話をします。

青木 何か具体的な出来事があったのでしょうか。

佐久間 小さな事例ではありますが、いろいろな色や形を組み合わせる玩具の小さなパーツの片付けについて、大人が決めたルールではうまく片付けができなかったこどもたちが、こども同士で何度も話し合っ片付け方法を決めたら、スムーズに進められるようになり、創作意欲まで変わってきたということがありました。こどもの声を大人が聞き、信じて任せていくなど、日々の小さな合意形成の経験を、保育園や学童という生活の場から積み重ねられるようにしていきたいと考えています。

また近年は自然災害が頻繁に起

こっており、災害時には、こどもたちの遊びや学びの機会が唐突に断たれることもあります。制度で守られにくい領域へ基金が届くことに、大きな意味を感じています。

これからの10年 社会に働きかける財団として

青木 耳塚理事はベネッセこども基金の発足時から、理事として助成事業の選考に関わってこられました。この10年でどのような変化を感じていますか。

耳塚 当財団にとって、成長と発達が見られた貴重な期間でした。どの団体を支援すべきかが見え、助成の枠組みも磨かれましたし、学び支援を学校の学習から体験へと拡大してきました。助成団体に寄り添う態勢も充実しました。設立時の、「こどもの学び支援を軸に中間支援に徹し、モデル性の高い事業を採択して行政の公的プログラム創設につなげる」という発想は、極めて優れていたと思います。

一方で、こどもを取り巻く課題の深刻さは一層明瞭になりました。直近の全国学力調査では家庭の社会経済的地位が低い層ほど子の学力の低下幅が大きい傾向があり、格差が拡大しています。貧困対策や学び支援はますます必要です。さらに文化的貧困にも目を向けねばなりません。家庭にある本の冊数や親の読書習慣、大人との会話などの文化的環境は、学業や将来の多様な生き方に直結します。

社会を変える
モデルとしての
財団に期待



ベネッセこども基金理事
耳塚 寛明
お茶の水女子大学名誉教授

これからの10年
現場を支えて
社会を動かす力に



ベネッセこども基金 事務局長
青木 智宏

文化は「相続」される。逆に言えば、経済が乏しくても文化的行動はこどもに受け渡すことができるのです。

教育と福祉の制度は分立し、責任主体も異なりますが、こどもにとっては一つの生活です。企業活動は効率化の名の下で、多くの敗者を生む構造がある。その社会でこどもの学びと生をどう支えるかを問い続ける必要があります。

青木 最後に、これからの10年に向けて一言ずつお願いします。

李 経済的にも文化的にも、外国ルーツや不登校の子にも——さまざまな場面で分断は確実に深まっていくと思います。公教育や地域の学びの場を通じて社会統合をどう実現するか。ベネッセこども基金にも、活発な議論と行動を期待しています。

佐久間 「Benesse／よく生きる」という理念を大切に、学びを軸に制度の狭間にいるこどもの声を拾い上げてください。こどもの意見を尊重する社会を広げる後押しをお願いします。

耳塚 ベネッセこども基金自体がモデルであり続けてほしい。助成の仕組みを磨くだけでなく、企業や行政を動かし、社会を変える力を持つ存在であってほしいですね。

青木 モデル性の高い事業への支援を通じて、社会に働きかける財団として、こどもたちの「よく生きる」を支え続けてまいります。今後とも皆さまのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

「学び」が 前向きに生きる力につながる



「重い病気を抱えるこどもの学び支援活動助成」
助成団体「シャイン・オン・キッズ」こども企画室メンバー

あきこさん(高校3年生)

中学受験目前で急性リンパ性白血病と告知を受け、約2年半の治療を経て寛解。現在は小児がん経験者として自身の経験や想いを伝えるべく、「シャイン・オン・キッズ」のボランティア活動等に取り組んでいる。

ベネッセこども基金の関わり

団体への助成に加え、こども家庭庁や国際小児がん学会アジア大会で、当事者のこどもたちの声を支援者に伝える場をつくらせていただきました。

≫ 学びへの意欲が前向きになる力をくれた

病気がわかった瞬間、「これまで頑張ってきた受験勉強がすべて無駄になってしまわないか」と、ショックで頭が真っ白になってしまいました。しかし、周りの方々は私の「受験したい!」という想いを汲んで、試験を受けられるよう奔走してくださいました。医師、学校、両親、誰一人欠けても受験はできなかったし、学ぶことをあきらめなくて良かったと今でも感謝の気持ちでいっぱいになります。「勉強は、病気が治ってからにしよう」と言われることもありました。当時の私は「合格した中学校に行きたい!だから回復に向けて頑張る!」という強い気持ちがあったからこそ、治療を前向きにとらえる心が持てました。



院内学級は、入院中も学習進度が遅れないよう勉強ができるありがたい環境でした。

≫ 伝える活動にも積極的。 「“今頑張る誰か”を応援したい」

現在は、「今頑張る誰か」がより良い治療に取り組める状況をつくりたい」という気持ちで、私の経験や想いを伝える活動にも取り組んでいます。2023年には、こども家庭庁での交流会で当事者としてお話を機会を、2024年には「国際小児がん学会アジア大会」で発表する場をいただき、小児がんを経験した自分だからこそわかることを多くの方に伝えることができました。特に嬉しかったのは、大人の方々がまっすぐに話を聞いてくださり、その場で改善点や実行できることまで具体的に提示してくれたことです。「当事者の声を伝える機会」の大切さに気づかされました。



「国際小児がん学会アジア大会」ランチョンセミナー(ベネッセこども基金とシャイン・オン・キッズの共同開催)での発表の様子。英語でのプレゼンでは、特訓の成果を出すことができました。

≫ 患者と家族に寄り添える 小児血液内科医になりたい

治療の経験から、心の持ち方がいかに大切かを学んだ私だからこそ、将来は「コミュニケーションを通じてこどもの想いを感じとり、その人のやりたいことを誰よりも尊重できる小児血液内科医」になりたいと考えています。現在は、医学部合格をめざしてまた受験勉強を頑張っています。大学生になったら、院内ボランティアとしてこどもたちの勉強のサポートにも挑戦したいです!

voice

認定特定非営利活動法人 シャイン・オン・キッズ
砂川未夏さん

あきこさんの話はいつも、「私たちが頑張らなくちゃ!」という熱い気持ちにさせてくれます。こども家庭庁など公的機関での発表をベネッセこども基金の皆さんと一緒に実現できたことは大きな一歩でした。これからは私たちは、こどもたちの笑顔や彼らの声を活動の起点にして、「黒子」になってこどもたちの想いを具現化するという姿勢を一貫して持ち続けていきたいです。



人として対等に意見を伝え合う カナダでの体験が、自信と力に



自主事業「カナダの社会的養護の当事者ユースとの交流プログラム」参加

ゆあさん(高校3年生)

児童養護施設で生活することを対象としたプロジェクトで2024年7月にカナダ・トロントに渡航。外国の文化に興味があり、将来の留学を見据えて現在は語学の勉強にも励んでいる。

ベネッセこども基金の関わり

プログラムの企画と、研修の運営に関わらせていただきました。(p.15-16にて紹介)

※本事業は、特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン、社会起業家白井智子氏、NPO法人チャイボラとの協働事業で、トロントの菊池幸氏と共に実施したものです。

≫ 誰とでも対等に意見を伝え合うカナダの若者たち

トロントではまず、現地の社会的養護経験者と交流する場がありました。彼らは私の話を「一人の人として対等に」聞いてくれていると感じました。「昔は荒れていた時もあったけれど、施設で出会った人のおかげで人間性が変わったんだ」と赤裸々に話してくれた方がいて、私だったら、「この話はしないでおこうかな」と心に秘めておくようなことも、話せる、そして周りが受け入れてくれるカナダの文化に触れることができ、視野が広がりました。



現地交流の様子。カナダの若者が積極的に自分の意見を言う姿が印象的でした。

≫ 「自分の言葉が伝わる」ことを実感。 達成感と自信がついた

交流の場では何度も言葉の壁にぶつかりました。でも、身振り手振りや知っている単語を使ってなんとかコミュニケーションをとろうとしたら、相手にも伝わり、そのやりとりがとても楽しいものになりました。またトロントの研修の中では、私たちが大人に伝えたいメッセージを考え、発信し、意見交換をする「こどもアドボカシー公聴会」というプログラムに取り組みました。オンタリオ州議事堂という大きな舞台上、国籍を越えてさまざまな大人に向けて発表できたことが大きな自信になりましたし、これまで心に溜めていた考えを伝えられて、気持ちがすっきりしました。



「公聴会」の発表準備では、チームで夜遅くまで話し合い、お互いの経験や想いをよく知ることができました。

≫ 「公聴会」での経験が 帰国後の“挑戦”の原動力に

トロントでは定期的に施設間の交流の場があるという話を聞き、「日本でも同じようなことができたなら…」と考え、自分の施設の職員に伝えました。すると、実際に県内の複数の施設で見学・意見交換会が実現したんです。新しいことに挑戦するのは勇気があるし、怖い気持ちもあるけれど、今後も自分から行動していきたいと思っています。

voice

社会起業家
白井智子さん

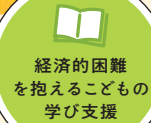


初めての異国で体力的な限界に挑戦しつつ、ひたむきにあらゆる事象から学びを得ようと頑張ったゆあさん。帰国から10か月後の研修で「このプロジェクトでは色々なチャンスに巡り合えて嬉しい」と語ってくれて、泣けました。関心の方に素直に従ってグローバルな進路を選んだことも嬉しいです。その大きなきっかけを、ベネッセこども基金さんと共に創れたことに感謝しています。



助成事業

助成事業は、こども支援に取り組む団体への助成を通じてこどもたちを支援する事業です。志を同じくする方々と共に、3つのテーマに取り組んでいます。



経済的困難を抱えるこどもの学び支援



重い病気を抱えるこどもの学び支援



被災したこどもの学びや育ちの支援



★2024年度助成実績★

採択団体6団体計1082万円
活動団体7団体（2023年度採択）

医療的ケア児
約2万人*2

難病のこども
約12.4万人*1

※1 出典：「小児慢性特定疾病児童とその家族の支援ニーズの把握のための実態把握調査の手引き書令和4年3月」（厚生労働省）
※2 出典：「医療的ケア児とその家族に対する支援に関する調査」令和6年3月（総務省行政評価局報告書）



(Pick Up)

入院中こそ質のいい遊び体験・学び体験を

現状と課題

入院中のポジティブな体験機会が少ない

勉強したり遊んだり友達と交流したり、やりたい気持ちがあっても、入院中は治療優先が基本。たくさんの制約が大きなストレスになることも。体調も整わない中、さまざまなことをあきらめ、自分を納得させる日々を送ることが多くなります。



取り組み

体調に合わせてできる夢中体験の提供

どんな工夫をすればこどもたちに夢中体験を提供できるか。病院の医療従事者の方々といねいに検討し取り組みを進めている団体があります。夢中になる体験ができることは、あきらめていた気持ちを前向きなものへと変化させます。「楽しい」「自分でもできる」「やれる」という実感が、入院するこどもたちの財産になっていきます。

一般社団法人Child Play Lab.

夢中になって遊び、「病気という経験」を力に

一般社団法人Child Play Lab.は、「病気のこどもたちが、自分らしく生きられる社会」をめざして活動しています。その取り組みのひとつが、自分だけの絵本をつくる「アドベンチャーBOX」。病気という経験を前向きな力に変え、こどもたちが自分の気持ちを表現し、深めていくことを応援しています。このBOXを通じて、大人たちもこどもたちの想いや考えに触れ、多くの気づきを得ています。こどもたちが夢中になれるよう、質の高い体験を大切に、そこから生まれる心の動きや人とのつながりを育んでいきます。



Child Play Lab.代表理事 猪村真由さん
1999年生まれ。医療系学生コミュニティや一般社団法人Child Play Lab.を立ち上げ、病児支援や教育事業を展開中。Hospital Play Specialist



アドベンチャーBOX



ワークショップの様子



「BOX」が大好きなこどもたちと

特定非営利活動法人ポプルワークス

映像表現のプログラムで「繊細さ」を強みに

放送局出身者が集い、児童精神科をはじめとしたこころの現場に関わってきました。ワークショップでは、生きづらさや悩みを抱えるこどもたちが、「映像制作」を通して自分の思いや発想を表現できる機会づくりを目指し、ディレクター・撮影技術・美術・編集・音響効果・プロデューサーなど多職種のプロがサポートしています。

制作に夢中になりながら発見と探求を重ね、繊細さを強みにして大きな成長を見せるこどもたち。院内外の大人にとってもこどもたちの個性を再発見する機会となり、完成に向けて喜び合う一体感も生まれています。

映像制作が「わくわくする入口」と「社会へとつながる出口」となり、こどもたちが未来へ一歩を踏み出す一助になればと願っています。



ポプルワークス代表理事 西澤道子さん
映像ディレクター・社会福祉士・精神保健福祉士。NHKで教育・福祉番組を制作後、温かな社会づくりをめざし退職後に法人を設立。福祉・医療・教育の専門家と連携し、メディアを活用したこども若者支援を展開中。



大阪市立総合医療センター内 児童青年精神科で実施



こどもたちが制作した渾身の映像作品（※一部をイラストに加工しています）

各団体の活動内容はベネッセこども基金サイトからご確認いただけます。





経済的困難を抱えるこどもの学び支援

経済的困難の中にあるこどもたちは学びや生活に困りごとを抱えがちです。コロナ禍や災害などによる打撃で将来の選択肢を失い社会的に孤立する家庭も。最近は自治体による学習支援も増えてきましたが、孤立しないための包括的な支援体制や、支援を持続可能にする地域の関係機関との協働も必要だとわかってきました。最大3か年の中長期的な計画で、地域と協働し包括的な活動に取り組む団体を支援しています。

★2024年度助成実績★

採択団体6団体計2137万円
活動団体18団体(2021～23年度採択)

こどもの
貧困
約8.7人に1人※1

高等学校の
中途退学者
約4万人※2

社会的養護
児童
約4万2千人※3

外国ルーツの
こども
約15万人※4

※1 出典：2024年国民生活基礎調査(厚生労働省)
※2 出典：令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(文部科学省)
※3 出典：令和6年4月 社会的養育の推進に向けて(こども家庭庁)
※4 出典：令和5年度 外国人の子供の就学状況等調査(文部科学省)

(Pick Up)

大人がつながり、こどもの学びを支援する

現状と課題

地域の官・民・学がつながっていないことで、こどものSOSが埋もれがち

行政・学校・地域団体の連携がないと、こどもに関する情報が共有されず、困難な状況にあることが見過ごされたり、支援が届かなかったりする事態が起きます。学習支援や居場所づくりも個別に動いてしまい、継続的で効果的な支援をしていくことが難しくなります。

学校



家庭



地域



居場所



取り組み

官・民・学のハブになり
早期介入ができる体制づくり

行政・学校・地域・大学が連携し、こどもの状況を早期に把握・共有することで、こどもの困りごとを見つけ、学習支援や居場所づくりなど、必要な支援をタイミングよく届ける体制が整います。それぞれの立場のニーズを把握し、団体がハブとなりネットワークをつくっていく動きをとることで、こどもたちを見守る持続可能な体制づくりができていきます。

特定非営利活動法人 COCONI

こどもを真ん中に、大人がつながる

こどもたちが直面する多様な課題に対応するには、身近な大人同士がつながり、こどもを支えるしくみが必要です。そこで大阪府摂津市において、保護者や地域の方々、企業、学校、教育委員会など多様な立場の大人がつながり、対話を重ねることで、こどもたちが安心して過ごせる学校内外の居場所づくりや、学校支援のしくみづくりに取り組んできました。これらの実践から、こどもを真ん中にして大人同士がつながることで、こどもたちがより健やかに育まれる学校や地域環境をつくることができると実感しました。今後も、こどもも大人もつながりをもてるしくみづくりに取り組んでまいります。



COCONI代表理事 水木千代美さん

商業施設の企画設計を経て、地域の居場所「さたけん家」を開設。こども食堂や学習支援を通じて人の輪が広がり、「すべてのこどもたちが一歩先への希望をもてる社会」をめざし法人を設立。



第四中学校に設けた、校内の居場所



別府小学校運営協議会の様子

一般社団法人 UMEプロジェクト

学校・施設・団体・大学のつながりを地域へ

「こどもたちの可能性が地域の未来を切り拓く」という思いのもと、広島県尾道市内の母子支援センターや児童養護施設で学習支援を行っています。関係機関と連携し、課題整理や情報共有を実施。対面・オンラインでの支援体制を整え、シフト制による継続的な学習支援を構築しました。学校や施設職員とのケース会議も進め、こども一人ひとりに合った支援の形を模索。また大学教授との連携や企業への資金協力依頼も進めながら、地域全体で支えるコンソーシアムの設立をめざしています。経済的困難だけでなく、不登校や発達障がいなど多様な課題にも対応できるよう支援を広げていきたいと考えています。



母子支援センターでの学習支援風景



学習支援に参画してくれた学生ボランティアさんたちの卒業式の様子



UMEプロジェクト代表 高橋真理子さん

東京都で学童保育に関わった後、尾道市に滞在。教育・経済格差を実感し、小学生向け居場所づくり「UMEプロジェクト」を立ち上げ、学習支援や困窮家庭のこどもへの学び支援に注力。

Check //

各団体の活動内容はベネッセこども基金サイトからご確認いただけます。



研修やつながり・交流の機会提供

こどもたちの学びを支え続けるためには、支援する団体自身の持続可能性が欠かせません。団体の課題や成長フェーズに応じた研修やつながりの機会を通じて、基盤強化と関係性づくりを支える非資金的支援に取り組んでいます。

情報交換・交流の場



共通の想いや課題を持つ団体が相互に活動を知り、つながり、学び合う2日間の交流会。情報交換やインプットを通じて、課題解決や、新たな連携のきっかけをつくっています。これまで同じ志を持つ団体同士が交流会をきっかけに、事業連携を開始するなど、つながりから生まれた成果も見られています。

私たちが
非資金的支援において
大切にしていること

組織基盤の
強化

団体の
成長フェーズに
合わせた支援

関係性
づくり

研修の場



- 資金集めだけでなく仲間集めの手法を学ぶ「ファンドレイジング研修」
- 協力関係を引き出す手法を学ぶ「協力のテクノロジー研修」
- 支援者向け「子どもの権利研修」

希望制で、専門家を招いての研修を実施。全体研修だけでなく、個別セッションを実施することで、団体ごとの課題や成長フェーズに応じた最適な学びの機会を届けられるよう心掛けています。

参加者からの声

（交流会について）



事業担当者

他団体の方の等身大の悩みを知ること、自分たちだったら、と少し先の未来の悩みやチャレンジを垣間見ることができました。



団体の代表

ファンドレイジングの多様な手法を、さまざまな具体例を通して習得できることを期待して受講しました。自分たちの中であいまいだったものを言語化・可視化していくアプローチが大変勉強になり、視野が広がりました。



事業担当者

全国のさまざまな団体の取り組みを知ることができ、今後の活動のヒントや頑張る熱量をいただきました。皆様とつながり、協力していくことの魅力をあらためて感じる事ができました。



団体の代表

団体の役割や注力すべきところが明確になりました。団体メンバーと共に受講することで、考えていることを共有したり、ブラッシュアップしたりすることができました。

2024年度募集および決定助成団体



経済的困難を抱えるこどもの学び支援

募集対象

経済的な理由により学習に困難を抱えるこどもたちの意欲を高め、学びに取り組む手助けとなる団体の活動

- 募集期間：2024年11月11日～2025年1月6日
- 応募数：132件
- 採択事業数：6件
- 助成総額：計21,369,736円（初年度）
- 助成対象期間：2025年4月1日～2028年3月31日（最大3年間）

団体名	申請事業名	所在地	初年度助成額
認定特定非営利活動法人 アイキャン	地域連携による外国にルーツを持つ就学前のこどもの日本語・母語の教育環境整備事業	愛知県	2,999,320円
一般社団法人 Kids Code Club	貧困の連鎖を断ち切るための総合的なデジタルスキル学習サポート	福岡県	6,000,000円
特定非営利活動法人 志塾フリースクールラシーナ	貧困世帯で発達障害や学習の困難を抱える高校生世代を対象とした学習会及びオンライン個別支援推進事業	大阪府	2,991,400円
一般社団法人 ソーシャルペタゴジーネット	居場所を地域のパーマネンシー（持続性保障）拠点にステップアップするためのプロセスモデル事業	北海道	3,500,000円
特定非営利活動法人 地域子育てネットすくさぽ	経済格差を始めとする教育格差をなくすために、北海道全域に学習支援を届ける大学生人材ネットワークを構築する事業	北海道	3,172,080円
認定NPO法人 Learning for All	困難を抱えるこどもの社会参画に向けた自立準備支援	東京都	2,706,936円



重い病気を抱えるこどもの学び支援

募集対象

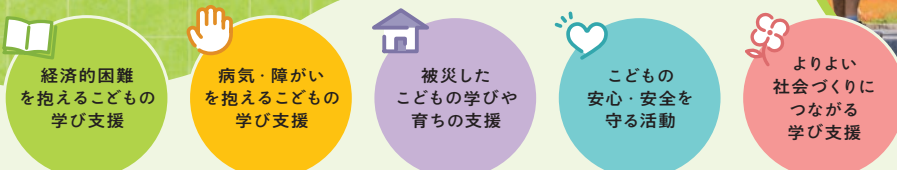
重い病気により長期入院や長期療養をしているこどもたちの意欲を高め、学びに取り組む手助けとなる団体の活動

- 募集期間：2024年6月24日～2024年9月1日
- 応募数：32件
- 採択事業数：6件
- 助成総額：10,820,450円
- 助成対象期間：2025年4月1日～2026年3月31日

団体名	申請事業名	所在地	初年度助成額
特定非営利活動法人 エゴノキクラブ	小児がんのこどものリーダーシップ育成事業	東京都	1,996,050円
認定特定非営利活動法人 シャイン・オン・キッズ	心のケアを軸とした長期入院治療を経験したこども達への社会復帰支援	東京都	1,999,600円
一般社団法人 Child Play Lab.	入院中の小学生を対象にした、ライフアドベンチャー教育のモデルづくりと検証事業	東京都	2,000,000円
特定非営利活動法人 北海道こどもホスピスプロジェクト	LTCのこどもと家族の状況を学びで改善する仕組みづくり～他地域展開～	北海道	1,057,000円
特定非営利活動法人 ポブルワークス	病院や自宅等で療養生活を送るこどもたちの内面を豊かに育む、映像制作ワークショップ実施事業	東京都	2,000,000円
特定非営利活動法人 にこり	法泉寺けあらば（医療的ケア児とその家族のQOL向上・災害対策に向けた旅行支援）	福岡県	1,767,800円

自主事業

自主事業は、ベネッセこども基金が企画・実施している事業です。こどもを支援するため、志を同じくする方々と共に5つのテーマに取り組みました。



経済的困難を抱えるこどもの学び支援



高校生がカナダのロールモデルと出会う
ユース交流プログラムの支援

現状と課題

社会的養護のもとにあるこどもたちは、自分の気持ちや希望を伝える機会が少なく、自らがもつ権利や価値に気づきにくい

生活環境や状況などによって、体験や自己決定などの機会に格差が生まれやすく、学びや成長の機会を逃してしまうことがあります。児童養護施設では18歳で退所しなければならぬところも多い一方で、進路選択についての情報が少ない、希望を伝えづらいといったことから、将来の描き方に悩むこどもも多くいます。

取り組み

カナダの若者と交流するプログラムを支援。
子どもの権利について理解を深め、自分の声の価値を認識する機会に

児童養護施設のこどもを含む高校生8名が、カナダへ7日間の留学へ。自分の意見をはっきりと表明し、自己決定していくカナダの若者の姿を見て、自分の気持ちや考えを表明することが自分の将来を切り拓くことにつながるという気づきや行動のきっかけとなりました。

※特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン、社会起業家白井智子氏、NPO法人チャイボラ、現地コーディネーター菊池幸工氏との協業で実現しました。

子どもの権利

すべてのこどもが主体としてもっている人権。生存・発達・保護・参加の権利がある。

子どもアドボカシー

こどもが意見や考えを表明できるようにサポートすること。

「子どもの権利」先進地域カナダ・トロントでの学びと交流

事前研修

国内にて子どもの権利や子どもアドボカシーについて事前学習。これから一緒に学ぶメンバーが集合し、チームビルディングを行いました。

カナダ・トロントへ

子どもアドボカシー活動がさかんカナダ・オンタリオ州・トロントへ。トロントの若者たちは、生活環境が何度も変わるといったつらい経験も言語化し、大人に意見を伝えていました。主体的に人生を歩む姿に刺激を受けるとともに、悩みや気持ちに共感し、心強く感じる場面も。



オンタリオ州の児童福祉や児童養護制度について話を聞き、意見交換



フードバンク施設でのボランティア活動にも参加



最終日は学びの集大成として自分の意見を大人に伝える「公聴会」を実施。これまで人に言えなかった気持ちを初めてオープンにできた人も多く、「金銭的な理由で将来の選択肢に悩む」「夢を叶える道筋を描くサポートを大人にしてほしい」など、力強い言葉が続きました。

事後研修

帰国後は振り返りとして「子どもの権利」を日常生活でどう実践するか話し合うワークを実施。「自分はどうか」「なぜそう思うか」など、意見や根拠を積極的に述べ、活発に議論しました。トロントでの経験が着実にこどもたちの力になっています。

帰国後の声

参加前は子どもアドボカシーのことを知らず、自分にできるか不安でしたが、現地での活動で自分の意見を話す力がつきました。帰国後、学校でも子どもアドボカシーについて調べるプロジェクトを始めました。大学に進学しても世界とのつながりを意識して学んでいきたいと考えています。

帰国後の声

帰国後、自分のいる児童養護施設で、施設の高校生の声をまとめて職員の人に伝えるという活動を始めました。



p.8の参加者体験談もぜひお読みください。



Check

くわしい実施レポートはこちらをご覧ください。





よりよい社会づくりにつながる学び支援

(Pick Up)

公教育での 「ダイバーシティ&インクルージョン教育」の推進

現状と課題

「社会にはさまざまな人がいる」ことを
体感する機会が少ない

日本の公教育では、病気・障がいがある人は別の場で教育を受けるとい歴史があります。教育現場の人員不足や、「全員が同じことをする」という教育の形なども背景にあり、ダイバーシティ&インクルージョン教育はなかなか進まない現状があります。多様な人がいることを体感する機会が少なく、さまざまな違いを受け入れづらい社会をつくる原因の一つとなっています。



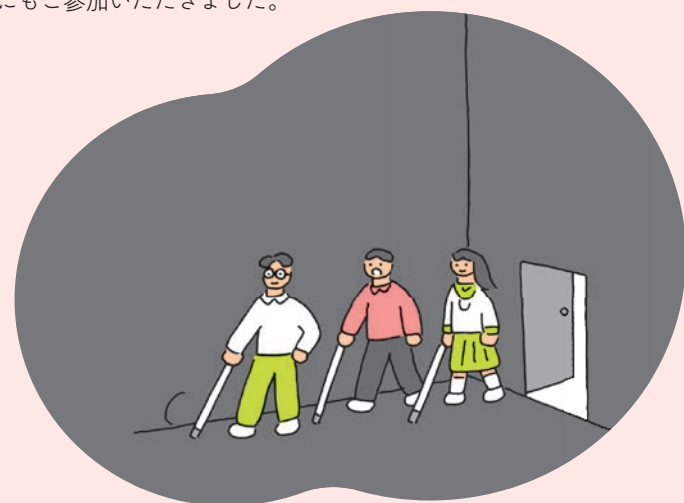
取り組み

視覚支援学校に、近隣の中学生在が訪問。
「視覚を使わない世界」の体験と、
生徒同士の交流を行う

大阪府教育庁との連携協定のもと、大阪府立大阪南視覚支援学校で以下を行いました。
大阪府教育長 水野達朗さんにもご参加いただきました。

- 近隣の中学校(和泉市立富秋中学校)の生徒が、視覚支援学校内で、「視覚のない世界」を体験(約60名)
- 大阪南視覚支援学校 教職員・保護者が「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」を体験(約50名)
- 大阪南視覚支援学校生徒と視覚障がい者スタッフの対話プログラム実施(約20名)

※本事業は、一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティと共に実施したものです。



Check

くわしい実施レポートはこちらをご覧ください。



視覚支援学校での「視覚のない世界」体験プログラム

プログラム内容

- 目を閉じた状態で道を歩く体験
- 暗闇での運動会(ダイアログ・イン・ザ・ダーク)
- 視覚支援学校の授業を体験(体育、理科、社会、国語など)



目を閉じた状態で、白杖(視覚障がい者が使用する白い杖)を使って点字ブロックの上を歩く体験



目を開けても何も見えない漆黒の暗闇での運動会体験



ゴールボール体験(目隠しをしながら鈴の入ったボールを転がしてゴールに入れることで得点とする球技)。視覚支援学校の生徒と一緒に競技

アンケートでも、多様性を前向きにとらえる生徒が増加

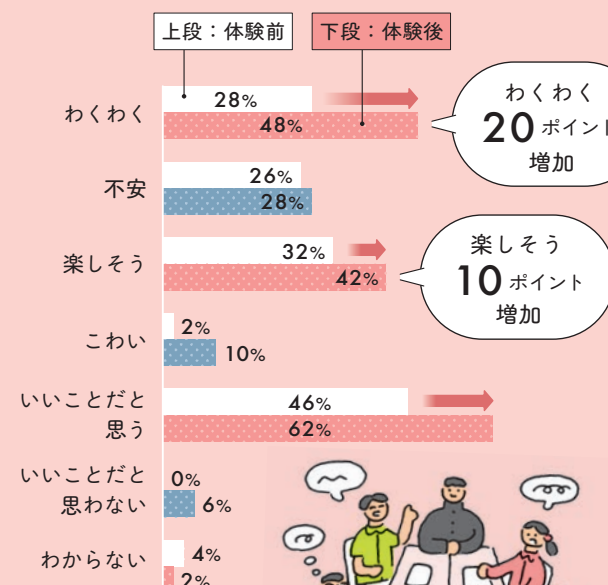
「自分たちとは文化や特徴が異なる人たちと触れ合うことをどう思うか?」という質問に対し、体験後は「わくわくする」「楽しそう」と答えた生徒の割合が増加。また、「障がいのある人について、どのように感じていますか?」という質問でも、体験後は「仲良くしたい」「親しみをを感じる」と答えた生徒が増加。多様性を前向きにとらえる生徒が増えました。

参加者の声

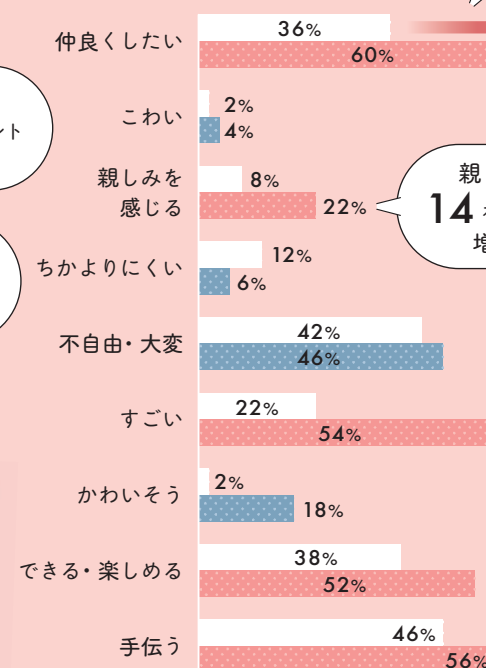
- 暗闇の中で相手の仕草や容姿をあまり気にせずにいられてとてもリラックスできました。心地よさを感じました。
- 視覚以外の感覚に集中できて、とても楽しい時間でした。
- 声を掛け合ったり、触れ合ったりすることで仲が深まりました。



Q 「自分たちとは文化や特徴が違う人たちと触れ合うことについて、あなたはどのように思いますか」



Q 「障がいのある人について、どのように感じていますか」





被災したこどもの学びや育ちの支援

能登でのボランティア派遣による
「こどもの居場所(あそび場)運営」

石川県能登半島では、2024年1月の地震と9月の豪雨災害による二重の被災により、インフラや施設が損壊し、子どもたちの学校や学童など、安心して過ごせる居場所が大きく失われました。子どもたちの日常を少しでも取り戻すために、現地で活動している特定非営利活動法人エティックと特定非営利活動法人Chance For Allと連携し、こどもの居場所運営(学び・あそび場の提供)と復旧作業のボランティアを募集しました。助成団体にも声をかけ、全国から多くのボランティアが参加しました。

活動概要

実施期間：2024年11月11日～12月27日
参加人数：約30人
活動場所：輪島市
活動内容：午前／現地ニーズに応じた復旧作業
午後／こどもの居場所運営

現場のニーズ

- こどもの居場所の喪失
- 地域内の担い手不足

ボランティアの
ニーズ

- 宿泊や受け入れ情報が不足
- 支援がしたくても、方法がわからず動けない

公益財団法人 ベネッセこども基金

「担い手不足の現場」と「支援したいボランティア」をつなぎ、双方が安心して活動できる環境を整えました。

ボランティア参加者からの声

子ども支援に関わりたという想いから、ボランティアに参加しました。活動を通して、「あそび」がこどものエネルギー源であり、学びや対人関係を育む大切な土台だと実感し、視野が広がりました。現在は休学し、常駐スタッフとして能登で活動しています。被災地や過疎地において、「あそび」を通して自分たちができることを日々考えています。一緒に「あそび」や能登の未来を考える仲間も募集中です。ぜひ能登にあそびに来てください！



神里 響さん

沖縄県那覇市出身。現在琉球大学4年を休学し、能登で特定非営利活動法人Chance For Allのあそび場の活動に参加している。

● 能登半島地震

発災：2024年1月1日
最大震度7(マグニチュード7.6)
避難者数：最大51,605名
(2024年1月2日時点)

出典：国土交通省 令和6年能登半島地震における被害と対応(令和6年5月)

● 令和6年奥能登豪雨

発災：2024年9月21～22日
石川県の住宅被害：1699棟
避難指示：114世帯／127人
(総務省消防庁より)



地震と豪雨の影響による被害(2024年11月時点の写真)



学校帰りの子どもたち30人近くが、居場所に駆けつけてくれました



病気・障がいを抱えるこどもの学び支援

病気療養中の子どもへの支援体制について、認知を広げる

特別支援学校における支援制度認知は2割程度

勉強・進学・学校生活…不安ややりたいことがあってもどこに相談したらいいかわからないままあきらめている子どもたちが多くいます。それもそのはず、病気療養の子どもたちを支える「小慢事業」*の認知は2割、自立支援員の認知はわずか3%です。

(病気療養児支援者全国ネットワーク構築に関するアンケート調査より)

まず「知ってもらう」ことから

病気療養の子どもたちが、自分らしく暮らし学べるために、まず自立支援員の存在を知りつながってほしい、という思いから、自立支援員の認知拡大の取り組みを認定特定非営利活動法人ポケットサポートと共に行っています。

※小児慢性特定疾病児童等自立支援事業(小慢事業)とは長期の療養を必要とする子どもたちの健やかな育ちや将来のために、地域ごとに小慢自立支援員やボランティア等がご家族からの相談や交流活動、必要な情報の提供、関係機関との連絡調整を行う事業のこと。



ライフステージに応じてどんな支援が受けられるのか等わかりやすく紹介しています。2025年度は自治体版をつくって展開中

閲覧はこちらから！>>



こどもの安心・安全を守る活動

教育プログラムを、学校などへ無償提供

こどもの安心・安全な環境づくりのための支援プログラムの無償提供を、財団設立当初から実施しています。ネット利用の低年齢化により、学校現場からのネットリテラシー教育へのニーズが高まっています。

2025年度からはより多くの方にご活用いただけるように、デジタルに移行していきます

防災 保育園・幼稚園向け

防災教育紙芝居
「じしんのときのおやくそく」

防犯 小学校低学年向け



子どもの安全・安心ハンドブックと安全教室実施パッケージ

ネット 小学校中・高学年向け



初めてのスマホ安心ガイドブックと安全教室実施パッケージ

シリーズ累計 のべ約 130万部*

※2025年3月時点

貸借対照表の要旨（2025年3月31日現在）

I. 資産の部			II. 負債の部			III. 正味財産の部		
科目			科目			科目		
1			1			1		
流動資産			流動負債			指定正味財産 (うち特定資産への充当額)		
現金預金			未払金			(338,534,660)		
			預り金			一般正味財産		
固定資産			負債の部合計			正味財産の部合計		
			18,821,184			379,923,507		
特定資産（事業積立資産）			1			負債及び正味財産合計		
338,534,660			2			398,744,691		
その他固定資産（什器備品）								
152,570								
資産の部合計								
398,744,691								

正味財産増減計算書の要旨（2024年4月1日～2025年3月31日）

		科目	当年度	前年度	増減
Ⅰ. 一般正味財産増減の部	1. 経常増減の部	(1) 経常収益	171,707,981	168,477,768	3,230,213
		受取寄付金	170,696,410	166,882,479	3,813,931
		受取寄付金	5,211,034	5,711,805	△ 500,771
		受取寄付金振替額	165,485,376	161,170,674	4,314,702
		雑収益	1,011,571	1,595,289	△ 583,718
		(2) 経常費用	175,758,543	171,871,399	3,887,144
		事業費	151,707,981	148,477,768	3,230,213
		支払助成金	62,414,132	66,461,288	△ 4,047,156
		支払負担金	26,791,651	13,613,448	13,178,203
		給料手当	24,803,072	25,097,852	△ 294,780
		旅費交通費	9,871,594	9,842,072	29,522
		委託費	7,083,486	8,190,216	△ 1,106,730
		その他事業費（通信運搬費、制作費など）	20,744,046	25,272,892	△ 4,528,846
		管理費	24,050,562	23,393,631	656,931
		給料手当	6,200,768	6,274,460	△ 73,692
		委託費	6,048,359	6,469,595	△ 421,236
		賃借料	1,900,878	1,844,699	56,179
		会議費	1,634,041	243,552	1,390,489
		制作費	1,554,300	1,987,700	△ 433,400
		その他管理費（印刷製本費、報酬など）	6,712,216	6,573,625	138,591
		評価損益等調整前当期経常増減額	△ 4,050,562	△ 3,393,631	△ 656,931
		評価損益等計	0	0	0
		当期経常増減額	△ 4,050,562	△ 3,393,631	△ 656,931
		2. 経常外増減の部	(1) 経常外収益	0	0
	(2) 経常外費用		0	4,756	△ 4,756
	貯蔵品廃棄損		0	4,756	△ 4,756
	当期経常外増減額		0	△ 4,756	4,756
	税引前当期一般正味財産増減額		△ 4,050,562	△ 3,398,387	△ 652,175
	当期一般正味財産増減額		△ 4,050,562	△ 3,398,387	△ 652,175
	一般正味財産期首残高		45,439,409	48,837,796	△ 3,398,387
	一般正味財産期末残高		41,388,847	45,439,409	△ 4,050,562
	受取寄付金		170,000,000	150,200,000	19,800,000
一般正味財産への振替額	△ 165,485,376		△ 161,170,674	△ 4,314,702	
Ⅱ. 指定正味財産増減の部	当期指定正味財産増減額	4,514,624	△ 10,970,674	15,485,298	
	指定正味財産期首残高	334,020,036	344,990,710	△ 10,970,674	
	指定正味財産期末残高	338,534,660	334,020,036	4,514,624	
	Ⅲ. 正味財産期末残高		379,923,507	379,459,445	464,062

名称	公益財団法人 ベネッセこども基金	
所在地	〒206-8686 東京都多摩市落合1-34	
設立年月日	2014年（平成26年）10月31日 ※公益財団法人移行日：2015年（平成27年）4月1日	
役員		
代表理事・理事長	五十嵐 隆	国立成育医療研究センター 理事長
代表理事・副理事長	福原 賢一	株式会社ちゅうぎんフィナンシャルグループ 社外取締役
理事	耳塚 寛明	お茶の水女子大学 名誉教授
理事	小見山 智恵子	国際医療福祉大学生涯学習センター 看護部門統括責任者
理事	青柳 光昌	一般財団法人 社会変革推進財団 代表理事専務
理事	マセソン 美季	国際パラリンピック委員会 理事
理事	佐久間 貴子	株式会社ベネッセスタイルケア 取締役常務執行役員 こども・子育て支援カンパニー カンパニー長
監事	尾尻 哲洋	税理士
評議員		
評議員	高野 一彦	関西大学社会安全学部長・大学院社会安全研究科長
評議員	宮城 治男	特定非営利活動法人エティック 創業者
評議員	岡本千恵（龍千恵）	特定非営利活動法人 ホースタウンネットワーク 理事長
評議員	清水 里子	株式会社ベネッセコーポレーション 執行役員 ものづくり推進本部本部長

※2025年9月現在

2025年9月 発行：公益財団法人 ベネッセこども基金 写真 表紙・p.1～2・裏表紙：柊木 功（nomadica）、 p.5～6：テル・浜野 イラスト：米村知倫	アートディレクション：細山田光宣（株式会社 細山田デザイン事務所） デザイン：藤井保奈（株式会社 細山田デザイン事務所） 構成：太田美由紀（p.5～6）、中屋葉月（p.7～8） 編集協力：竹内彩子 印刷・製本：株式会社 協同プレス
---	---

Support

ご寄付のお願い

ベネッセこども基金では、こどもたちの未来を支えるために、これからも多くの方と手を取り合いながら、支援の輪を広げていきたいと考えています。いただいたご寄付は、大切にお預かりし、責任をもってこどもたちの支援に活かすとともに、その使い道を活動報告などを通じていねいにお伝えしています。皆様からの温かいご支援をお待ちしております。



How to support

ご寄付の方法

以下の口座でご寄付を受け付けています

銀行名 みずほ銀行 新宿西口支店
番号 (普通) 口座番号1189837
口座名義 ザイ) ベネッセコドモキキン

※みずほ銀行より送金いただく場合、ATMも含めて
本支店間の送金手数料は無料となります。

WEBサイトからも簡単にご寄付いただけます



<https://congrant.com/project/benekikin/19242>

※公益財団法人の認定を受けているので、寄付金控除の対象となり、確定申告を行うことで税制優遇の対象となります。
領収書をご希望の場合は、お手数ですが事務局までご連絡ください。

お問い合わせ先

公益財団法人ベネッセこども基金 事務局

TEL 042-357-3659

月～金 10:00～17:00 * 祝日・夏季休暇・年末年始を除く
※事務局メンバー不在など、お電話がつながりにくい場合があります。

公式HP: <https://benesse-kodomokikin.or.jp/>

問い合わせ先のアドレス: kodomokikin@grop.co.jp

\\ 最新情報は
各種SNSでも //

